

NEWSLETTER

Physical History No.1

発刊にあたって

日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(A)「近代移行期における地域情報とその蓄積過程に関する比較制度研究」（課題番号：19203018）による研究助成を受けて、「近世地域情報研究会」という新たな研究会を出発させました。

現在、研究チームは8名から構成されています。このニュースレターは、この研究会の活動を中心にお届けする予定です。

ニュースレターの副題にPhysical Historyという名称を掲げているのには理由があります。いずれ明らかになると思います。

村山 聡



Physical History Research Project
(PHRP)
Rocky Mountains, Colorado, USA,
October 04, 2007



第1回近世地域情報研究会を琴平で開催します。上記の写真は金毘羅宮で開催される大規模な巡回展の案内から借用させて頂きました。この展覧会につきましては、金毘羅宮の公式ホームページ (<http://www.konpira.or.jp/museum/main/index.html>) を参照してください。

今回の研究会は、2008年1月6日から8日にかけて行う予定です。

今回の研究会の目的

新たな研究プロジェクトを開始しましたが、研究内容についての調整が必要であります。研究代表者である村山は研究企画に関する趣旨説明を再度行う必要があります。

また、各研究分担者のこれまでの研究成果についての紹介などを踏まえて、今後の研究の方向性を確かめる必要もあると思います。近代移行期という時空間をいかに扱うかは個々の研究者のアプローチの仕方に左右されます。

この研究会では、主に、ローカルヒストリー・アプローチあるいは比較史料学的方法による研究蓄積を行うことはもちろんですが、同時にこのアプローチの方法をさらに検討していくことも課題にしています。

なお、研究代表者ならびに研究分担者の所属は以下のようになっています。

<研究代表者>

村山 聡 (香川大学・教育学部・教授)

<研究分担者>

磯田 道史 (茨城大学・人文学部・准教授)

川口 洋 (帝塚山大学・経営情報学部・教授)

鬼頭 宏 (上智大学・経済学部・教授)

高木正朗 (立命館大学・産業社会学部・教授)

長谷部 弘 (東北大学・経済学研究科・教授)

東 昇 (九州国立博物館・学芸部・研究員)

溝口常俊 (名古屋大学・環境学研究科・教授)

研究プロジェクトの趣旨

<課題>

近世日本の史料体系はどのようなものであったのか。特定の農村や複数の農村を対象とした地域に関して、どのような情報がどのような種類の人々によって共有されていたのであるか。領主文書、地方文書そして寺社文書など多様な構造を有している近世日本の史料体系に関して、古文書の種類や分類は広く知られており、また、庄屋文書など各家単位の文書目録作成などにおいては、すでに膨大な研究蓄積がある。しかし他方で、近世文書の膨大な史料群はどのような全体系を有し、何が継続的に保持され、何が変化していったのかが明らかにされた研究は管見の限り存在しない。

<視点>

個別の歴史資料に関し、そこに表現された内容を分析するのは当然であり魅力的である。しかし他方で、特定の時代や地域の史料体系は、信頼関係のネットワーク、コミュニティ構造そしてさらに権力関係のあり方との深い相互関係にあり、史料体系自体が特定の地域と時代の特徴を示している。にもかかわらず、この点が注目されることは少ない。たとえば、家族構造やライフコース分析における

比較研究はなされてきたものの、分析データを得ることのできる史料自体が歴史的な地域性を有していると指摘されることは少ない。このような問題設定は、近世ヨーロッパと近世日本の双方に関して、丹念な地域史的な資料収集に従事してきた経験から発した研究代表者独自のものである。

<方法>

そこで、本応募課題では、近世日本の人口現象において特徴的ないくつかの地域を取り上げ、地域情報のあり方とその蓄積過程を史料体系の分析を通じて明らかにする。つまり、人口関係資料、財産関係資料、地域環境関係資料などの史料体系の特徴を把握し、その体系的特徴と経済人口学的な地域特性との相互関係からその地域の特徴を把握しようと考えている。もっとも、史料体系の分析が具体的にどのような方法を意味するかが問題であろう。研究代表者が意図しているのは、第1に、研究分担者の東がその専門分野とされている資料学的解読である。つまり、種々の文書の作成・保管・管理・活用のあり方を再現・構築することにより、当該文書の成立の背景に隠されている社会や人間関係を明らかにしようという方法である。そし

て、第2に、研究代表者が折りに触れ指摘して来たように、また同じく研究分担者の磯田が『武士の家計簿』で明らかにしたように、歴史資料はただ偶然に残されているのではなく、その存在そのものが歴史分析の対象になりうる。つまり、文書作成の意図と目的の解読である。そして第3に、史料体系の比較が可能なデータベース検索・分析ツールの開発が不可欠であり、たとえば庄屋文書などに関して文書目録自体を分析できるようにする。

<目標>

以上のような史料群の体系的分析の方法に基づいて、以下のような目標を設定したい。特に個別の史料群を扱って研究を行っている研究者ならびに一般の地方史研究者に対して、多面的に検索可能かつビジュアルなデータベースの活用を通して、

(1) 選択された特定地域の史料体系の全貌を提示することを目標にする。また、特定の庄屋文書などに対象範囲を限定しつつ、さらにいくつかの地域を比較検討することによって、

(2) 近代移行期における地域情報の多様性と同質性の構造を明らかにし、

(3) 近代化の準備段階において不可欠であった地域情報の蓄積過程つまり日本独自の創発的近代を明確にすることを目標にする。またそのような近世期に形成された地域情報の基層構造が近現代経済史にどのような影響を与えてきたかについても可能な限り明らかにしたいと考える。

近世日本社会の史料体系について、美作の矢吹家文書や天草の上田家文書など各地域の庄屋文書を基礎として、

(1) 選択された藩や幕領における村落レベルでの史料体系の差異と特質を明らかにすること、そして、

(2) 具体的な全体像を再現できるデータベースを構築することを課題にする。比較制度分析(=上記で述べた史料体系の分析)を行なうのは、本研究グループにおける各研究者が、自ら史料を収集し、さらに十分な研究実績と蓄積のある地域である。

<分析対象地域>

具体的な分析対象地域は、以下の4種類、5地域である。

(1) 人口増を経験した地域としては、九州の幕領天草、特に高浜村を中心とし、

(2) 一定の人口減少から一定の回復あるいは停滞をした地域としては、津山藩領あるいは美作の村々、中部地方、下塩尻村等の村々、そして

(3) 決定的な人口減少後、一定の回復が見られた一関藩などの東北農村や奥会津の村々に加えて、

(4) 大都市近郊として、関東地方、多摩その他においても特定の対象地域を選定していく。

<4つの論理体系>

そのような地域選択の上で、次の研究計画・方法において詳述する4つの論理体系に関して、史料体系を分析する。つまり

- ① 住民把握の論理
- ② 財産把握の論理
- ③ 地域把握の論理
- ④ 近世文書の論理

という4つの論理体系に焦点を絞り、庄屋文書、寺社文書あるいは領主文書に関して、

(1) 近世日本の史料体系の論理構造を明らかにし、

(2) それが人口変化という基本的な社会変化とどのような相互関係にあったか、

(3) また、その変遷がどのように反映されていたかを明

らかにする。

史料体系の分析視角については、初年度に研究グループ構成員による各地域研究での成果に基づいて、史料体系を明らかにしうるキーワード設定とその分析視角を構築する。

<4年計画と担当>

この研究プロジェクトに対する研究助成は、2007年4月から2011年3月までの4年間である。その4年間の年度進行に合わせて、以下の4つの研究課題を順次取り上げる。社会把握の論理に関するこれらの研究課題についても、研究協力者の専門性からグループ編成を行ない、取りまとめの責任を担っていくことにする。

① 住民把握の論理は、歴史人口学を専門とする高木・川口、② 財産把握の論理は、経済史研究が専門である村山・長谷部、③ 地域把握の論理は、歴史地理学ならびに地域環境史特に地誌研究を専門としてきた溝口と近世ドイツの地域把握の論理を研究している村山が担当する。そして ④ 近世文書の論理は、近世日本の古文書学を専門とする磯田・東を中心に村山が加わる。

<史料群と課題>

平成19年度に比較分析を開始するのは、第1に、住民把握の論理に関する史料群である。いわばヒトの把握に関するものであり、ライフコースアプローチの基準に照らした史料群の整理と分析を課題とする。出産、結婚、死亡というイベントをキーワードにした分析視点から、人別改帳、宗門改帳、増減帳、過去帳、御暇願書などの戸口関係の史料群や、移動情報、さらにたとえば、少子化対策と関連する産子養育関係資料の体系が問題にされ、救済関係

の史料群も対象となる。この年度以降は、第2に、財産把握の論理に関する史料群、つまり、モノとカネの把握に関する史料群、特に、財産と所有に関係した検地帳、年貢帳、高分帳、諸役帳、地損綴り、賦役帳等の史料体系を取り上げる。第3は、地域把握の論理に関する史料群、主に、地誌や絵図など地理的情報あるいは村況など村の鳥瞰図的把握に関する史料群を分析対象とする。上記の1群と2群の史料群とも関係するが、近代統計に頼るマクロ的把握が成立する以前の社会における地域把握のあり方は、史料体系の分

析にとって、その変化と持続性を問題にする場合、非常に重要なものとなる。そして最終年度、第4課題の近世史料群に関する全体系を分析する近世文書の論理は、上記の三つの論理体系の分析を踏まえて、特に権力対民衆のせめぎあいと地域情報の蓄積の論理を明らかにすることを課題にする。平成19年度はこれらすべての史料群の予備調査を行い、年度進行に従って、重点的にそれぞれの史料群の分析を行っていく。

第1回 近世地域情報研究会のプログラム

Jan. 6, 2008

13:00-17:00:

近世探訪一丸亀港から琴平までの街道を歩くー

20:00-22:00: オープニングセッション

Jan. 7, 2008

09:00-12:00: 第1セッション

14:00-18:00: 第2/3セッション

20:00-22:00: ディスカッション1

Jan. 8, 2008

09:00-10:00: ディスカッション2

午後、金比羅ならびに高松(エクスカッション)

第1回 近世地域情報研究会の宿泊先/研修先
宿泊先ならびに研修先: すし駒旅館

住所: 香川県仲多度郡琴平町神明町612

tel 0877-75-2226

Email sushikoma@mpd.biglobe.ne.jp

編集後記 (DECEMBER 08, 2007)

このニュースレターの発行は、村山が行っております。現在行っている各種調査研究プロジェクトである「近世地域情報プロジェクト」(科学研究費基盤A「近世地域情報研究会」)、「溜池文化の比較研究」(香川大学特別奨励研究)ならびに「遠隔教育の比較研究」(文部科学省委託事業)の統合プロジェクトであるPhysical History Research Project (PHRP)に関する案内などを発信しています。

連絡先: 村山 聡

香川県高松市幸町1-1、香川大学教育学部

tel/fax: 087-832-1571 (office)

Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp